

# 沢登の六角堂と切子①

ふるさと  
の171  
誇り



博しレポート



屋根は土蔵建築に特徴的な「置き屋根」で、三手先組み物という豪壮な組手によって支えられている。昭和13年の写真ではまだ見られないが、現在は垂木の小口(先端)が白く塗られている。



昭和13年の補修後の様子(沢登区提供)。戦勝祈願の額が時代を物語っている。丁寧に積み重ねられた石積みやコンクリートの階段などは現在と同じ造りであるが、瓦や開口部上部の模様、石造物等の配置は現在と違うことがわかる。その後、昭和56年に屋根瓦や壁の工事等が行われている。



祭典ではお堂の中で神事も行われ、3面の開口部に切子が展示される。



祭典では開口部の切子越しに、内部の灯りがもれ、お堂自体がお灯笼のように暗闇に浮かび上がる(左写真)。奉納された切子は、先達により各賞や等級がつけられる(右)。



刻まれているものがあります。「麻の葉」は県指定無形民俗文化財の「六角堂の切子」の地紋として大切にされているもので、六角堂と切子の密接な関係性を表しているようです。「切子」は護符として地域に伝えられる伝統工芸で、十月の祭典では六角堂に奉納展示されます。六角堂は切子と同様に沢登地区のシンボルの存在と言えるでしょう。  
〜次号へ続く〜

## 六角堂切子の祭典

- 令和3年10月13日(水)
- 切子の展示 13:00~20:30
- 神事 16:30頃

通常より規模を縮小しての開催となりますが、六角堂への切子の奉納展示と神事は行われる予定です。(新型コロナの状況により変更の可能性もあります。)



沢登六角堂(南アルプス市指定文化財・平成9年指定)

指定文化財となるような六角建築は、そもそも全国的に見ても多くはありません。岐阜県にある鹿苑寺六角堂は室町期まで遡る稀な例ですが、その他はほぼ江戸時代以降のもので、沢登六角堂は、建物の規模も大きく、豪壮な組み物によって屋根を支えるなどの特徴がありますが、何よりも、土蔵造りという構造は全国的に見ても稀有な存在と言えます。  
お堂内の梁には「麻の葉」の模様が

沢登地区にある「六角堂」は、一辺約3mの六角形の平面形をした土蔵造りの建物で、同じく六角形の平面形をした石積みの基壇の上に建ちます。  
聖徳太子信仰を伝える六角建築として知られ、聖徳太子像と太子が信仰した如意輪観音像が祀られたとされます。伝承では、平安時代には沢登に創建されたといわれ、また、天正一八(一五九〇)年に龍沢寺東方の境内地に移されたといわれます。文献史料に登場するのは寛文四(一六六四)年のことで、現在の地へ移転されたことが記されています。しかしその後、沢登集落の百軒以上が焼失した、文化四年の一連の大火で六角堂も焼失してしまいました。現在の六角堂は、文化七(一八一〇)年に田嶋村(現在の田島区)の木工棟梁九兵衛により再建されたものです。